

昭和新山の半世紀 ～岡本次郎撮影, 新山生誕直後のカラー写真～

Time of a half century on Showa Shinzan -color photos taken by Jiro Okamoto in 1953 right after the birth of the Shinzan-

岡本 研 (北海道士別高等学校)・石井 彰洋 (士別市立士別小学校)・新井田清信 (北海道大学大学院理学研究科)・地徳 力 (地団研北海道支部)・川村 信人 (北海道大学大学院理学研究科)

Kiwamu Okamoto (Shibetsu High School), Akihiro Ishii (Shibetsu Elementary School), Kiyooki Niida (Graduate School of Science, Hokkaido University), Tsutomu Chitoku (AGCJ Hokkaido branch) and Makoto Kawamura (Graduate School of Science, Hokkaido University)

はじめに

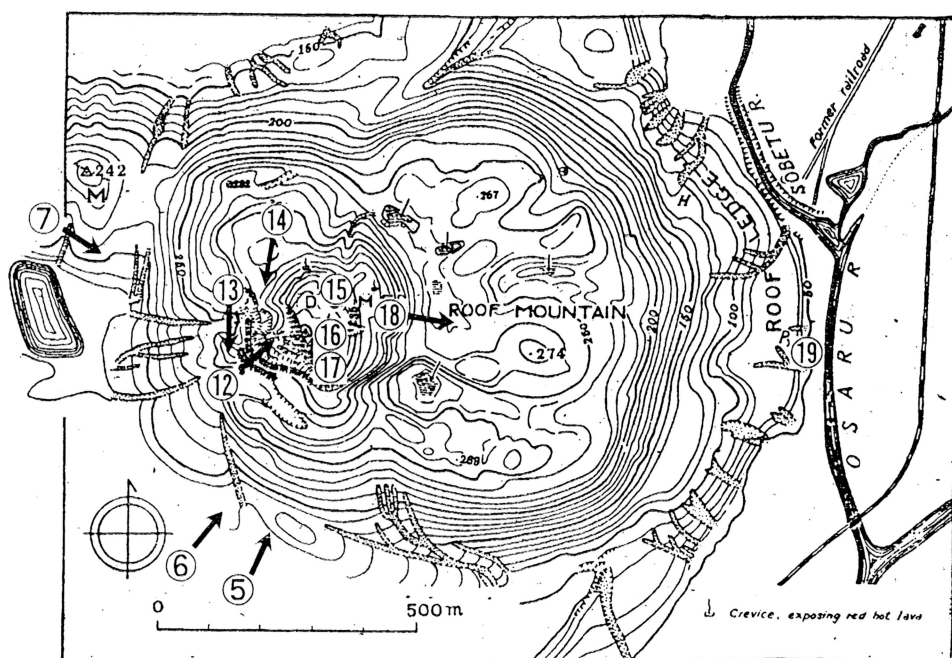
昭和18年から20年にかけて、まさに第二次世界大戦のまっただ中に昭和新山は誕生した。その動乱の時期ゆえに、世界の火山学者はその貴重な火山成長の経過を克明に観察する事はできなかった。生成時の詳細な記録としては唯一、当時壮瞥町郵便局長であった三松正夫氏によるものが残されているが、それ以外は断片的な写真やスケッチが残存している状態である。

我々は今回、昭和新山生成8年後の昭和28年に撮影された貴重なカラー写真19枚を入手することができた。それを元に現在の昭和新山と49年前とを比較してみることにした。それによって、昭和新山のこの50年間の変化をとらえることもできるだろう。

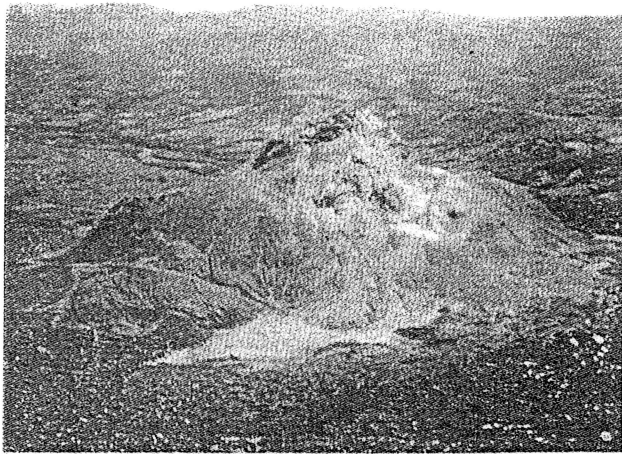
昭和28年の昭和新山カラー写真—岡本写真集

これら19枚のカラー写真(以下;“岡本写真集”と呼ぶ)は、元北海道教育大学旭川校教授の岡本次郎氏が撮影したもので、昭和28年(1953年)の昭和新山の様子が、当時としては珍しいカラー写真として記録されている。氏は、新山生成当時に東北大学の学生として研究を行っており、新山生成後初めて測量を行い、等高線の入った地形図を作成している(Okamoto, 1949)。岡本写真集に含まれる19枚の写真は山体全体から山頂にかけて、さまざまな角度から撮影されており(第1図)、生成から8年が経過している時期とはいえ、カラー写真ならではの当時の貴重な画像が撮し出されている。

平成6年に発行された昭和新山生成50周年記念写真集「麦圃生山」には数多くの貴重な写真が掲載さ



第1図 岡本写真集撮影位置・方向図。地形図はOkamoto (1949)による。○数字は岡本写真集の写真番号に対応。



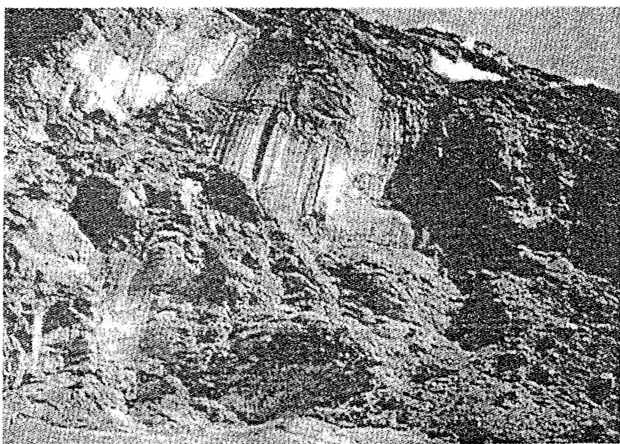
第2図 岡本写真集⑧. 有珠外輪山東側, 大有珠付近から俯瞰した昭和新山.

れ, 当時の生々しい様子を我々に伝えてくれるが, 昭和20年代の写真はいずれも白黒写真となっている.

岡本写真集公開の経緯

岡本写真集は, 現在まで公にされることのなかったものである. 昨年, 地団研北海道支部のインターネットニュースグループ上の会話の中で, 筆者の一人で岡本次郎氏の長男である岡本 研により, その存在が明らかになった.

岡本写真集は, “コニカ1号”(絞りf3.5固定・50mmレンズ)によりリバーサルフィルムに撮影された. そのフィルムからのダイレクトプリントをスキャナによりとりこみデジタル化した. 2001年11月の時点でフィルムは著しく退色していた. そのため, 筆者の一人(川村)によって, 画像ソフトを使用したレタッチが施され, できるだけ自然な色合いに近づくように大幅な色調補正を受けている. したがって, 撮影当時の本来の色合いから多少異なったものになってい



第3図 岡本写真集⑭. 天然レンガの表面の擦痕(条線).

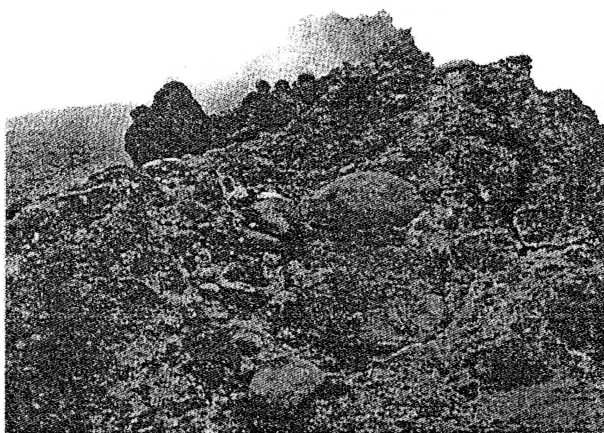
る可能性もあるだろう. その後, これらのデジタル画像は, 地団研北海道支部ホームページ上に公開された(http://strati.sci.hokudai.ac.jp/agej_hok/album/okamoto_page1.htm).

現地確認と探索

昭和新山の現状を確認し, 岡本写真集で撮影された露頭や情景を探索するための昭和新山登山は, 平成14年5月18日に5人の参加で行われた. 昭和新山南西側の駐車場から登山道に入り, 円頂丘麓部を西側からぐるりと時計回りに回り込み, 東側の屋根山の上に出て, そこから山頂に直登するルートをとった. 岡本次郎氏による当時の写真撮影位置や撮影方向を記載した資料(第1図)に基づき場所の確認と写真撮影を行ったが, 我々の想像以上に地形あるいは露頭の変化が激しく, また類似の地形や風景が多かったことなどから, 撮影位置・対象を特定することはかなり困難な作業であった.

岡本写真集の中の特にすばらしい記録写真のひとつと言える「溶岩の上昇に伴って形成された鏡肌とその表面に刻印された垂直方向の条線」(第3図)はずでにその大部分が崩落して失われていた. 壁面にその小さな破片が散在している状態であったが一部が断片的に残存していた.

山頂付近の地形・露頭は, やや崩壊しているものの, 意外なことに, 想像したほど大きな変化がなかった. 山頂付近の持ち上げられた河川堆積物であるF礫層は現在も良く観察できた(第4図). また, 岡本写真集で頂上付近で撮影されたいくつかの写真はその撮影位置をほぼ特定でき, 同じようなアング



第4図 現在の山頂付近の円礫層. 2002/5/18新井田撮影



第5図 岡本写真集⑰、通称“酒瓶露頭”の比較探索写真。背後は伊達市街北東の山地。

での比較写真が撮影できた（後述；第5図）。

“酒瓶露頭”の検証

第5図は岡本写真集の⑰で、我々が“酒瓶露頭”という愛称で呼んでいるものである。この緑色の“酒瓶”には、実際には何が入っていたのであろうか？この写真は、岡本氏自身の写真説明では「円頂丘上面に見られた円礫層の近接写真」となっており、昭和新山山頂部付近（第4図）の露頭と推測される。この露頭の背後には、なだらかな傾斜を持った牧場とおぼしき部分を含む山地が写っており、おそらく（現在の）伊達市営牧場周辺の地形であろう。これらの点を手がかりに現地を探索した結果、第5図右のような露頭が見いだされた。もちろん、半世紀を経過して露頭表面の円礫や岩塊がそのままであるわけではないが、露頭の形状はほぼ保存されていると判断された。

“サンゴ岩”について

昭和新山生成の観測記録「ミマツダイヤグラム」は有名である。彼の観察記録は、画号『三松愛山』の名前で、多数の日本画（スケッチ）としても後世に残されている。ここでは、三松愛山が記録したサンゴ岩の「尖峰」（ササクレ岩塔）に注目した（第6図）。なお「サンゴ岩」の命名者は岡本次郎氏で、その由来は、岩体の割れ目から夜間は光が漏れてサンゴのように見えたから、ということである（岡本次郎氏談）。

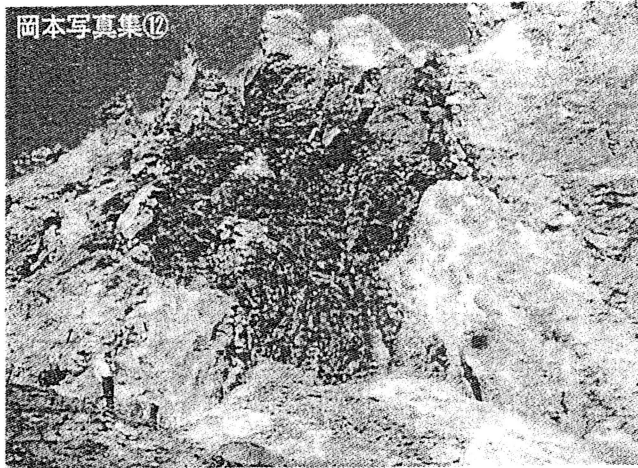
サンゴ岩の出現： 三松正夫「昭和新山生成日記」（1962）によれば、1945年5月10日「・・・第4火口より一連の尖峰をもつ小塔は、生長して遂に煙外に

姿を露わしてきた。・・・」とある。これは、昭和新山の活動が始まった1943年12月29日から約1年半、昭和新山の主塔（溶岩塔）の出現（1944年12月4日）から、ほぼ半年後にあたる。

岩塔の推上： 溶岩塔の出現様式を示したスケッチは多数あるが、サンゴ岩の「尖峰」はとくに先が尖っていて「鋭く天をつく」形（ササクレ岩塔）に描かれている。事実、「昭和新山生成日記」（三松、1962）に掲載されたスケッチも写真も岩塔はササクレだった形をしている。三松愛山の目には、「岩塔推上はササクレ岩塔の出現から始まる」と写っていたに違いない。主塔の成長を示すスケッチ「生成途上の昭和新山西南頂」（三松、1962、1970）にそのことを垣間見る。三松（1962、1970）は、先の尖った岩塔をしばしば「尖岩」と記述している。

ササクレ岩塔のイメージ： 手塚治虫のマンガ「火の山」（手塚、1995）の主題は、昭和新山である。この中に岩塔出現の1コマがある。「...それは溶岩塔だった まるでノコギリの歯か するどい剣を並べたように 無数の尖峰がジワジワと もり上がってくるのだ・・・ その先端はのびては折れ またもり上がり 身震いして サンゴのように育って いくのだった」（p.75）。

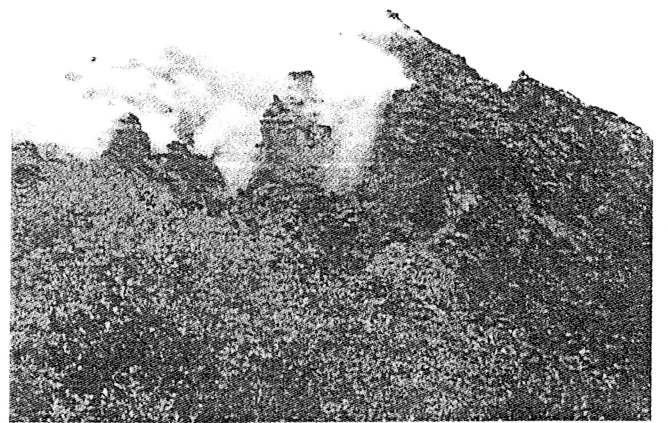
なお、ここで観察され表現されている岩塔は、デイサイト質溶岩そのものではない。実際には、高温のデイサイトによって焼かれた焼成粘土（天然レンガ）で、これが尖峰状に突き上げられたのである。現在、「サンゴ岩」の名の由来となった上方に伸長した焼成粘土はすでに大部分が崩落し、その下部が残されているのみであった。上部の崩落については、壮瞥町三



2002/5/18(川村撮影)



2002/6/22(新井田撮影)



第6図 “サンゴ岩”の比較探索写真。上左：岡本写真集⑫。サンゴ岩の下から見上げる。真ん中に黒色の岩脈？が見える。下左：現在のサンゴ岩下部。全体に赤茶けており、色の異なる部分は判別できなくなっている。上右：岡本写真集⑬。サンゴ岩上部の“ササクレ岩塔”。下右：現在のサンゴ岩上部の状況。“ササクレ岩塔”の基部は残存している。

松記念館館長の三松三郎氏によると、次のような状況だったようである。「サンゴ岩のとがった岩塔は、1977年までは一本だけですが残っていました。場所は、サンゴ岩の裏側（高温部）でした。今では、崩落してなくなりましたが、角張った基礎の部分が残っています。その最後の一本が崩落したのは、1977年噴火の開始直後です。地震の振動のために崩落しました（2002.6.22談）。」

おわりに

昭和新山誕生直後の貴重な記録である岡本写真集の各写真における撮影対象やそのアングルを現在の昭和新山で特定する、という目的は、山容の変化と風景の類似性が原因で完全に達成することはできなかった。しかし、それが逆に昭和新山の半世紀にわた

る時間経過を我々に実感させてくれた。それと同時に、地質学という学問ジャンルの中には、このようなアプローチもあるのだということをやいまさらながら実感できたのは、大きな収穫であったと感じている。

文 献

- 三松正夫（1962）昭和新山生成日記。壮瞥，1-209。
 三松正夫（1970）昭和新山その誕生と観察の記録。講談社，1-268。
 Johane Ziro Okamoto（1949）Morphological Note on the New Mountain, Syowa-Sinzan, Usu Volcano, Hokkaido, Japan. *Annals of the Tohoku Geographical Association*, 2, No.1, 20-25.
 昭和新山生成50周年記念事業実行委員会（1994）昭和新山生成50周年記念写真集「麦圃生山」。
 手塚治虫（1995）火の山。文春文庫ビジュアル版，1-255。